

平成23年3月11日

平成22年度（第61回）芸術選奨文部科学大臣賞 及び同新人賞の決定について

文化庁では、昭和25年から毎年度、芸術各分野において、優れた業績をあげた方、または新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞または新人賞をおくっています。このたび、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

1. 趣旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

2. 部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論等、メディア芸術の11部門にて実施。受賞者には、賞状、賞金30万円が贈られます。

3. 贈呈式

3月17日（木）午後5時から、合同庁舎7号館東館3階講堂（東京都千代田区霞が関3-2-2）において行います。なお、贈呈式での取材は可能です。

＜担当＞文化庁文化部芸術文化課

芸術文化課長：山崎 秀保（内線2822）

活動奨励係長：南川 貴宣（内線2832）

電話：03-5253-4111（代表）

03-6734-2835（直通）

平成22年度(第61回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：19名 文部科学大臣新人賞：11名】

	文部科学大臣賞			文部科学大臣新人賞		
	氏名	職業	授賞対象	氏名	職業	授賞対象
演劇	つかやま まさね 津嘉山 正種	俳優	公演「黄昏」の演技	すずき ゆみ 鈴木 裕美	演出家	公演「富士見町アパートメント」の企画・演出
	のざわ きんし 野澤 錦糸	文楽三味線方	公演「妹背山婦女庭訓(いもせやまおんなていきん)」他の成果			
映画	えもと あきら 柄本 明	俳優	映画「悪人」の演技	おぎのみ なおこ 荻上 直子	映画監督・脚本家	映画「トイレット」の成果
	せ げ なかひさ 瀬々 敬久	映画監督	映画「ヘヴンズ ストーリー」の成果			
音楽	すなざき ともこ 砂崎 知子	箏曲演奏家	「砂崎知子箏リサイタル 協奏曲のタペ」の成果	ふじい あきこ 藤井 昭子	地歌箏曲演奏家	「第50回藤井昭子地歌ライブ」他の成果
	ぬまじり りゆうすけ 沼尻 竜典	指揮者	歌劇「ラ・ボエーム」他の成果			
舞踊	なかむら めぐみ 中村 恩恵	舞踊家・振付家	「The Well-Tempered」他の成果	おの あやこ 小野 絢子	バレエダンサー	公演「シンフォニー・イン・C」他の演技
	やまむら わか 山村 若	日本舞踊家	山村流舞扇会における「江戸土産(えどみやげ) 慣(みならうて) ちよっと七化(ななばけ)」の成果			
文学	しのだ せつこ 篠田 節子	作家	小説「スターバト・マーテル」の成果	きと しゆり 城戸 朱理	詩人	詩集「幻の母」の成果
	つじはら のぼる 辻原 登	作家	小説「闇の奥」の成果			
美術	オノデラユキ	アーティスト	「オノデラユキ 写真の迷宮へ」展の成果	たばいも 束芋	現代美術家	「束芋：断面の世代」展の成果
	くま けんご 隈 研吾	建築家 東京大学教授	「構原・木橋ミュージアム」他の成果			
放送	にしむら よしき 西村 与志木	プロデューサー	ドラマ「坂の上の雲」の企画の成果	わたなべ 渡辺 あや	脚本家	ドラマ「その街のこども」の脚本
大衆芸能	かやま ゆうぞう 加山 雄三	俳優・歌手	「若大将50年！アリーナコンサート」他の成果	ひらはら あやか 平原 綾香	歌手	アルバム「my Classics2」の成果
	みやがわ だいすけ 宮川 大助 みやがわ はなこ 宮川 花子 みやがわだいすけ はなこ (宮川大助・花子)	漫才師	なんばグランド花月11月公演における「YESと言おう!」他の成果			
芸術振興	み わ まさひろ 三輪 眞弘	作曲家 情報科学芸術大学院大学教授	著作「三輪眞弘音楽藝術 - 全思考1998 - 2010」他の成果	なかむら まさと 中村 政人	アーティスト	「アーツ千代田3331」の開館及びその運営
評論等	あんに 雲妮	映画研究者・評論家	著作「戦時日中映画交渉史」の成果	くろだらいい 黒ダライ見	戦後日本前衛美術研究家	著作「肉体のアナーキズム」の成果
	わたなべ ひろし 渡辺 裕	東京大学大学院教授	著作「歌う国民 唱歌、校歌、うたごえ」の成果			
メディア芸術	みやもと しげる 宮本 茂	ゲームクリエイター	「スーパーマリオギャラクシー2」他の成果	クワクポリヨウタ	メディア・アーティスト	「10番目の感傷(点・線・面)」他の成果

※敬称略、同一部門内五十音順
※受賞者名の下線は女性

平成22年度（第61回）芸術選奨

文部科学大臣賞 贈賞理由

部 門	受 賞 者	贈 賞 理 由
演 劇	津嘉山 正種	津嘉山正種氏は永年にわたって劇団青年座の中心俳優として活躍してきたが、11月の青年座公演アーネスト・トンプソン作「黄昏」で、老いを自覚し死の恐怖と向き合いながら生きる不器用で皮肉家の老教授ノーマンの人柄と、偶然ひと夏を共に過ごすことになった娘の義理の子のピリーとの暮らしによって次第に活力を取り戻していく姿を緻密な演技で見せ、ままならぬ人生と親子夫婦の関係を描いた作品の本質を見事に表現した。
演 劇	野澤 錦糸	平成7年に始まる竹本住大夫氏とのコンビはいよいよ円熟味を増し、その質の高さと安定感是他の追隨を許さない。特に4月の通し狂言「妹背山婦女庭訓」では「妹山背山の段」を端正かつ力強く弾いて、時代物らしい輪郭の大きさをあらわした。また6月の素浄瑠璃の会「桂川連理柵」の「帯屋の段」では、市井の男女の哀歎を余韻翳々たる響きで細やかに表現した。時代世話を問わない、硬軟自在の撥さばきは、今後の文楽三味線を担う証である。
映 画	柄本 明	映画にとって俳優の存在は大変重要である。映画はシナリオがあって監督がいてカメラがある、映像を創作する側はカメラの前で演じる俳優に全てを委ねなければならない。また俳優の良し悪しは映画の完成度に貢献したかで計られる。柄本明氏は数々の映画に出演し映画の完成度に貢献してきた。本年度の「悪人」の演技はまさに映画の完成度を押し上げた。娘を殺害された父親を演じた氏の存在無しには人間の罪は表現できなかったろう見事な演技であった。更に円熟した俳優とならんことを願う。
映 画	瀬々 敬久	瀬々敬久氏の4時間38分に及ぶ長時間の大作「ヘヴンズ ストーリー」は、綿密に構築された脚本、力強い映像によって、見ているうちに映画の描く時の流れに同化して登場人物たちと同じ時間を過ごしている気がしてくることに驚かされる。日本のいまを切り取ったように自然で誇張がないが、そのすべてをわし掴みにして差し出されたような衝撃があることにもまた驚かされる。見て驚き、描かれた人物の行動を通してその驚きが胸にしみる、という映画芸術にふさわしい喜びが味わえたことを高く評価したい。
音 楽	砂崎 知子	砂崎知子氏は、伝統的な技法を遵守しつつ、現代的な感覚を盛り込んだ演奏で、古典曲から現代曲にいたる幅広い活動を続けてきた。「協奏曲の夕べ」と題する昨年のリサイタルでは、独奏の箏と邦楽器を中心とする楽器群との合奏に焦点をあてた意欲的なプログラムを企画し、宮城道雄、長澤勝俊、船川利夫、唯是震一の四作品を取り上げて、そのいずれにおいても箏の独奏を担当、作品の時代性と特徴を生かした芸術性の高い演奏を披露した。
音 楽	沼尻 竜典	沼尻竜典氏は優れた読譜力をもつ指揮者として若い頃から頭角を現し、オーケストラを中心に説得力のある演奏を繰り広げてきたが、近年はオペラの分野でも着実に活動の幅を広げている。平成19年にびわ湖ホール第二代芸術監督に就任し、日本人歌手、日本人スタッフによるオペラの水準を向上させる上演を積み重ねてきたことは高く評価される。「ラ・ボエーム」、「トリスタンとイゾルデ」などでその力量を存分に発揮したこの一年は、さらなる飛躍を期待させる充実した成果を挙げた。
舞 踊	中村 恩恵	中村恩恵氏が作るダンス作品は、流れるような動きがしなやかな肉体造形を作り、行間を匂いやかな官能が浸して、静かな緊張感と深い瞑想に誘う。平成22年に振付し自ら踊った「The Well Tempered」「Les Fleurs Noirs」(黒い花)などの舞台は、テクニックと内面的表現が渾然一体をなし、振付家としても、ダンサーとしても、他に抜きん出た頂点を標した。ヨーロッパのバレエ団で得た豊かな経験が、生来の優れた素質を磨き上げて形成した、類い稀な結実である。

部 門	受 賞 者	贈 賞 理 由
舞 踊	山村 若	「江戸土産 慣ちよつと七化(みなろうてちよつとななばけ)」は山村流六世宗家・若が流儀伝承の座敷の舞の地歌「江戸土産」と、歌舞伎七変化所作事「慣ちよつと七化」の復活を試み、一つの舞台空間で構成した作品である。「慣ちよつと七化」は山村流流祖・友五郎が文化十年に振付、三世中村歌右衛門が演じた「江戸土産」の元であるが、「七化」の復活では「江戸土産」を手掛かりに、様々な資料を検証した成果であり、さらに座敷から劇場空間への導きも巧みで、山村流ならではの作品の仕上がりを見せた。
文 学	篠田 節子	「スターバト・マーテル」は、推理とサスペンスを通して、現代日本の学歴社会、格差社会の実情はもとより、国際競争のさなかにあつて下請会社を痛めつけ、社員を痛めつけてでも生き延びるほかない大企業の姿や、それとともに荒廃してゆく家庭のありさまなどを鮮やかに浮かび上がらせた秀作。作者がこれまでに発表した長篇小説に比べむしろ小振りだが、そのためにかえって手法が凝縮され端的に示されており、ひとつの結節点を思わせ、今後の活躍をさらに期待させる。
文 学	辻原 登	「闇の奥」は、熊野の奥にあるという小人たちの集落の伝説から語り始められ、その伝説にかかわるこれもまた伝説的なひとりの民俗学者の足跡を訪ねるというかたちで展開してゆく、奇想天外な冒険物語。台湾へ、ボルネオ島へ、さらにチベットの奥へと、舞台を広げてゆく物語は、コンラッドの同名の小説以上に、作者自身の文壇登場作「村の名前」を思い出させ、作者がひとつのサイクルを終えて、また新たな次元へと踏み出したことを強く感じさせる。
美 術	オノデラユキ	「オノデラユキ 写真の迷宮へ」展(東京都写真美術館)は、国立国際美術館における回顧展を除けば国内では断片的にしか紹介されてこなかったこの作家の全貌を明らかにする極めて意義深い展覧会であった。オノデラユキ氏の作品は、写真映像のもつ両義性や曖昧さなどを明らかにしながら写真の存在論的な部分へと切り込むコンセプチュアルなものであり、技術的にはきわめて精緻で職人的でさえある。現代美術と写真といった二つの分野においてこの作家が国際的に高い評価を得ている理由もそこにあるといえるだろう。
美 術	隈 研 吾	隈研吾氏の近年の活動は、一作ごとに建築材料の選択、構成に新しさを見せるものであり、現代建築の表現の可能性を拡大しつつけている。築地松竹ビル、サントリー美術館、根津美術館などの作品は、都市における建築文化を豊かにすることに寄与するものであった。今回の受賞対象となった高知県梶原町での仕事は、地元の産材を生かし、地方の建築文化を豊かにするものであった。この幅広さと安定した実力は、大きな存在感をもつ。
放 送	西村 与志木	ドラマの創り手として、常に可能性に挑む姿勢を貫いてきた西村与志木氏は、映像化は不可能といわれてきた「坂の上の雲」のドラマ化を実現させた。その作業を主導して多くの困難を克服し、積年の夢をかなえた執念と才覚は賞賛に値する。ドラマは壮大なスケールで日本近代の黎明期の鳴動を描きながら、そこにあつた青春の光と影を凝視して、観る人に多くの示唆を与えた。
大衆芸能	加山 雄三	若大将・加山雄三・弾厚作。俳優、シンガー・ソング・ライターとして常に時代を先取りしてきた加山雄三氏。エレキギター、ウクレレを片手にボートを操り、サーフィン。スクリーン、ステージに話題を振りまいて50年。爽やかな素顔は戦後の若者の思考を一変し、加山サウンドは日本のJ-POPの原点になった。ナイスミドルも今や熟年の星。73歳にしてアルバム作りにも挑戦。座・ロンリー・ハーツ親父バンドを率いた東・西「若大将50年！アリーナコンサート」も成功。“君といつまでも”を実証した。

部 門	受 賞 者	贈 賞 理 由
大衆芸能	宮川 大助 宮川 花子 (宮川大助・花子)	宮川大助・花子氏は、夫婦漫才の伝統である女性上位のスタイルを継承、第一線に立ち続けてコンビ歴31年。「子供の教育」「仲直りの方法」など、“近代漫才の父”秋田實が提唱した、日常の話題を無邪気な笑いで表現する漫才を研鑽してきた。その型や内容は二人がそれぞれの大病を乗り越えるごとに飛躍的に進化し、現在は「なんばグランド花月」を拠点に活動中。特に11月の舞台「YESと言おう!」は、テレビサイズに矯正されない本物の漫才芸として、夫婦漫才のひとつの完成形が見られた。
芸術振興	三輪 真弘	三輪真弘氏は、音楽の概念を根本から問い直す作業を通じて新しい音楽の可能性を探求する試みを、最先端のメディアを駆使して重ねてきた。平成22年の新刊「三輪真弘音楽藝術—全思考1998-2010」には、人間の知覚システムを再考しつつ時間空間の斬新な体験を提案する方法論が集積され、真に前衛的な音楽創作論として話題を集めた。地域と密着した「NEO都々逸」の創作やフォルマント兄弟のプレゼンテーションも秀逸であった。
評論等	晏妮	1980年代半ばに川喜多記念映画文化財団の客員研究員として来日した晏妮氏は、映画史の分野で研鑽を重ね、本書を上梓した。満州事変を皮切りに始まる十五年戦争(中国では十四年抗日戦争)と複雑に関係あった映画をめぐる支配・被支配、占領・被占領の状況と個々の映画関係者の言説を当時の資料を中心に調査、分析していく精神の強靱さ。中国人による中国映画を製作した川喜多長政の理念が侵略を続ける日本の国策と合致したことも見逃さない。
評論等	渡辺 裕	渡辺裕氏は明治期以来の音楽について、単に音楽的側面から考察するのではなく、音楽を社会・政治・歴史等との全体的な枠組の中で捉え、「国民」というキーワードで読み解くことによって、偏りのなく、しかも一貫した文化論を展開している。氏は膨大な、部分的にはこれまで顧みられることのなかった資料を発掘し、既成の価値観に縛られることなくその意味を読み解くという地道な作業を通じて説得的な論を構築することに成功している。
メディア芸術	宮本 茂	日本発の文化として世界中を席卷するテレビゲーム。その根源は、ファミコンを世界中で大ヒットさせる原因となった、宮本茂氏の「スーパーマリオブラザーズ」から始まる。近年では、ニンテンドーDSやWiiの新しいインターフェース開発に従事し、常にゲーム文化のリーダー的存在として、先頭を走ってきた。「マリオ」誕生から25周年でもある平成22年には、最新作の「スーパーマリオギャラクシー2」で、最先端のCG技術を駆使し、宇宙に飛び出したマリオの冒険ファンタジーを表現。家族全員が隔てなく安心して楽しめる氏の作風は、世界中で評価を集め、国内外でさまざまな賞を受賞している。

平成22年度（第61回）芸術選奨

文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部 門	受 賞 者	贈 賞 理 由
演 劇	<u>鈴木 裕美</u>	あるアパートの一室。その同じ空間を舞台に、四人の劇作家が書き下ろしたまったく別の四作品を連続上演したのが「富士見町アパートメント」である。本公演を企画し、全作を演出した鈴木裕美氏は小劇場から大劇場、ストレートプレイからミュージカルまで幅広い作品を手掛け活躍している演出家であるが、演出家として様々なリスクが予想されながらも観客目線に立った企画と新たな高みを目指す演出家としてのチャレンジ精神と覚悟を見せた。
映 画	<u>荻上 直子</u>	「かもめ食堂」において、フィンランドを舞台に、それぞれの生き方を求めた女性たちを絶妙な距離感で描き出した荻上直子氏は、「食へのこだわり」をキーワードに、シンプルな表現力で映画のミニマル・アートともいべきユニークな世界を創出した。この斬新なスタイルは「トイレット」においては、英語を話さない日本から来た祖母と、外国育ちの孫の関係を軸に、異文化問題から現在の家族関係まで広げることで、独自の展開を見せ今後の展開へ期待を抱かせてくれた。
音 楽	<u>藤井 昭子</u>	平成13年6月以来ほぼ2ヶ月に一度のペースで開催してきた「藤井昭子 地歌ライブ」は、さまざまな演奏家を迎え、古典音楽を継承し新しい可能性を探り、質の高い演奏を展開しながら、今年度で50回の節目を迎えた。他に年に一度の「藤井昭子演奏会」(通算11回)や、「JIUTA 地歌 藤井昭子」(英語による解説、通算3回)、海外演奏旅行、放送などで、国内外に地歌の真髄の発信につとめており、今後の発展が大いに期待される。
舞 踊	<u>小野 絢子</u>	新国立劇場バレエ団入団(平成19年)当初から注目されていたが、平成22年は年間を通じての活動でさらに大きな成果を挙げた。「白鳥の湖」(1月)のオデット・オディール、「カルミナ・ブラーナ」(5月)の運命の女神フォルトゥナ、「火の鳥」(10～11月)、「シンデレラ」(11～12月)のタイトルロールなど、古典から現代バレエまで幅広いレパートリーの主役を繊細な表現と的確でクリーンな技術で演じきり、バランシン振付「シンフォニー・イン・C」(10～11月)では豊かな音楽性を印象づけた。バレエ界の明日を担う大器。今後ますますの活躍が期待される。
文 学	<u>城戸 朱理</u>	城戸朱理氏の「幻の母」は、「川の始まり」をめざす現実の、また想像上の旅の行程を良質の抒情的詩想へと昇華した、美しい連作詩篇である。氏のこれまでの作品の特徴をなしていた綺語の戯れが抑制され、静かな声調のうちに人生への思いが沈潜する。「この旅は終わることがない……／始まりを尋ねることは／終わりを問うことではないから」。同時刊行された「世界一海」と併せ、大きな成熟を予感させる一達成をここに見る。
美 術	<u>束 芋</u>	束芋氏は、立体的に構成したアニメーション映像からなる観る者に身体的な体験を促す諸作品によって、国内外で高い評価を受けている。日本の社会にひそむ残酷さと不条理を、日常生活を題材にユーモアをまじえながら鋭くえぐり出し、人間と外界とのかかわりを執拗なまでに生理を通して追求するなど、その作品は独創性に富む。横浜美術館と国立国際美術館で開催された「束芋 一断面の世代」では多数の新作が発表され、そこにはこの作家の類いまれなる想像力と深い洞察力がいかに示されていた。将来が大いに期待できる作家である。

部 門	受 賞 者	贈 賞 理 由
放 送	<u>渡辺 あや</u>	<p>阪神・淡路大震災当時、小学生と中学生だった男女が神戸の街を彷徨するその追悼の夜から早朝までの時間をオールロケのオリジナル脚本としてリリカルにまとめた。言うなれば草食系男子と肉食系女子の互いの体験の差異を抱えながらの微妙な距離感の表出が何気なさの中に光っている。彷徨の最後に交わす別れのハグが男女の出会いの甘やかな哀しみとなって残り、平成21年の「火の魚」(NHK)に続くドラマの脚本での実力を示した。</p>
大衆芸能	<u>平原 綾香</u>	<p>クラシックの名曲に歌詞をつけ、洗練された編曲と巧みな歌唱で現代に蘇らせる平原綾香氏の試みを集約した平成21年度作品「my Classics!」は第51回レコード大賞優秀アルバム賞を受賞した。その続編となる「my Classics2」ではバロックからジャズやゴスペル、最新のミュージカルまで多彩な曲に挑戦して、単なるカヴァーとは一線を画す創意に満ち、ロドリゴの「アララフ協奏曲」を基にした「スペイン」の歌唱など賞賛に値する成果がもたらされた。</p>
芸術振興	中村 政人	<p>アーティストとしての活動と並行して様々な公共的プロジェクトを創設した中村政人氏は、平成10年より千代田区をベースに若い表現者たちの場を開き、「コマンドN」(平成10年・秋葉原)や「KANDADA」(平成17年・神田)の活動を経て、平成22年に廃校となっていた区立練成中学校の再利用計画として「アーツ千代田3331」を開設。多彩な活動が集まるプラットフォームを形成し、ディレクターとして目覚ましい活躍を見せている。</p>
評論等	黒ダライ児	<p>1960年代の前衛パフォーマンスについての、貴重な記録と分析である。パフォーマンスというと演劇との関係に注目しがちだが、本書は美術家たちによる実践の記録である。日本では1920年代から前衛パフォーマンスがあり、決して欧米の影響ではなかったことも、日本社会の異議申し立てのひとつの現れであったことも、本書からわかる。前衛パフォーマンスが日本のどのような歴史や社会と関連があるか、今後さらにその広がりを探るために不可欠な業績であろう。賞によって人々の記憶にとどめるべき仕事である。</p>
メディア芸術	クワクポリョウタ	<p>クワクポリョウタ氏は早くからメディアアートに新風を吹き込んできた。「10番目の感傷〈点・線・面〉」はありふれた日用雑貨が作り出す光と影の圧倒的な美しさが大きな反響を呼び、「ニコダマ」は瞬きする一対の目玉が身の回りのものに存在感を与える意外性とポップなデザインで商品としても高い支持を得た。一見対照的な二作品は、日本的な感性の再発見、テクノロジーの可視化、使い捨て文化による環境破壊への危機感という点で一貫したコンセプトに基づいている。</p>

平成22年度（第61回）芸術選奨

選考経過

<演劇>

古典劇と現代演劇が並行している演劇界であるが、選考審査員・推薦委員があげた候補者は、大臣賞候補15名、新人賞候補21名と例年に比して候補者が多かったことがあげられる。特に現代演劇が多く、大臣賞候補11名、新人賞候補16名が推薦され、特定の候補者に集中しなかったのも今回の現代演劇の特徴と言える。

第一次選考審査会では大臣賞候補5名、新人賞候補5名に絞られた。内訳は、歌舞伎俳優2名、俳優4名、演出家1名、劇作・演出家1名、文楽三味線方1名、舞台美術家1名と多ジャンルにわたったのも今回の特徴である。第二次選考審査会では、大臣賞は最初3人の候補者に票が分かれたが、討議の結果、劇団青年座公演「黄昏」の80歳を越えるノーマン・セイヤーⅡ世役の演技の成果で津嘉山正種氏と、文楽公演「妹背山婦女庭訓」ほかの文楽三味線方の成果で野澤錦糸氏を選出した。新人賞は自転車キンクリーブーツカンパニー公演「富士見町アパート」の企画・演出の成果で鈴木裕美氏に票が集中し決定した。

<映画>

本年度の映画部門には、選考審査委員と推薦委員から推された候補者、大臣賞13名と新人賞15名の推薦があった。第一次選考審査会では委員各自が推薦理由を述べ、各候補者の作品を見直した上で、自由闊達な意見交換と入念な討議を重ねて、大臣賞4名、新人賞4名の候補者を絞りこんだ。第二次選考審査会では、各委員によってまず大臣賞の各候補について慎重に審議を重ねた結果、全九章から構成され、4時間半におよぶ群像劇の見事な脚本を卓越した監督手腕で仕上げた「ヘヴンズ ストーリー」の瀬々敬久氏が全員の推挙で選ばれた。残る一人は、投票に持ち込まれ、特に「悪人」の助演者としての演技と、俳優としての存在感により作品の評価を高めたという理由で柄本明氏が選ばれた。新人賞も大臣賞選考と同様の方式で慎重に論議した結果、女性の眼差しによる感性豊かな創作表現力を駆使し、その才能を十分に発揮した「トイレット」の脚本・監督、荻上直子氏に決定した。

<音楽>

本年度、選考審査員および推薦委員から推薦された候補者は、大臣賞11名、新人賞12名であった。第一次選考審査会では、全候補者について本年度の活動とこれまでの活動歴、また表現の方向性と技術的な問題点などを慎重に吟味し、大臣賞候補を3名、新人賞候補を4名に絞り込んだ。そして第二次選考審査会では、贈賞のタイミングや社会的影響なども考慮しつつ活発な討議を重ねた結果、箏曲演奏家の砂崎知子氏と指揮者の沼尻竜典氏を大臣賞に、地歌箏曲演奏家の藤井昭子氏を新人賞に決定した。三氏とも各分野において、卓越した音楽性をもって着実かつ独創的な演奏活動を展開してきたが、とくにこの一年間の活動で、みずからの進むべき道を見定め、目覚ましい成果を上げたことが高く評価された。なお候補者のなかには、すでに受賞しているもおかしくない実力と業績を備えた音楽家や、今後も推薦を受ける可能性が高い音楽家も含まれていた。次年度に期待が寄せられる人材が多かったことを付記しておきたい。

<舞踊>

日本人の舞踊に対する関心は、世界の舞踊のすべてを積極的に受け入れる傾向を示している。その流れを反映するかのように、選考審査員、推薦委員は幅広いジャンルから多彩な候補者をあげた。大臣賞候補は13名、新人賞候補は12名だった。第一次選考審査会では、各候補者の業績について審査員同士が本音の意見をたたかわせ、大臣賞候補を4名、新人賞候補を5名にしぼった。第二次選考審査会では、今年度の舞踊界全体の動向を考えて結果を出すことを申し合わせ、大臣賞と新人賞の選考を同時に進めた。大臣賞は、「The Well-Tempered」を首藤康之氏と、「Les Fleurs Noirs」を熊川哲也氏と踊り、デュエットのおもしろさを示した中村恩恵氏の演技と創作、「江戸土産 慣ちよと七化」の巧みな構成と演技が注目され、山村流に伝承される歌舞伎舞踊の流れを明らかにした山村若氏が評価され、両名の受賞が決定した。新人賞は、新国立劇場バレエ団公演における小野絢子氏の年間を通じての好演を評価し、今後の活躍に期待して選出した。

<文学>

本部門の選考審査員及び推薦委員によって推された候補者は、大臣賞12名、新人賞8名であった。

大臣賞は小説、句集、翻訳を含み、新人賞は小説、詩集であった。第一次選考審査会に際しては、個々の作品について慎重に検討を重ねた末、大臣賞の候補として6名(小説4名、句集1名、詩集1名)、新人賞の候補として4名(小説3名、詩集1名)を第二次選考の対象とすることに決定した。

第二次選考審査会では、まず各委員がそれぞれ最も優れていると認めた作品をあげ、十分に時間をかけて討議した。その結果、辻原登氏の小説「闇の奥」が、小人族の存否を調査すべくへき地に赴いて消息を絶った学者の、生死を探索する冒険の興趣を凝らした点を評価され、大臣賞に決定した。また篠田節子氏の「スターバト・マーテル」は中学同窓の中年の男女が30年ぶりに再会、しかし男が企業犯罪に巻き込まれ、二人が吹雪の北海道で死亡するまでの物語の構成の妙を示した作品として、大臣賞に選ばれた。新人賞についても大臣賞と同様の方式で討議を重ね、城戸朱理氏の詩集「幻の母」を選出した。さまざまな川を媒体としながら、そこに天地万物の母を想定する力業を行使して、宇宙論的な詩想を結晶させたと評価された結果である。

<美術>

美術部門で推薦された候補者は昨年を上回り、大臣賞18名、新人賞14名であった。例年のことだが、表現分野は多岐にわたり、絵画(洋画、日本画)、彫刻、建築、インスタレーション、映像、写真、書道、デザインを含むものである。第一次選考審査会では、全体にわたる検討の結果、大臣賞候補は11名、新人賞候補は5名に絞り込まれた。第二次選考審査会においても、改めて候補者の検討がおこなわれた。その結果、大臣賞としては、まず建築の隈研吾氏が選出された。次に、拮抗する二候補が全く領域の異なる分野であったため、投票によって写真のオノデラユキ氏が選出された。

新人賞も同様に、候補者に関する意見交換ののち、おおかたの評価が東芋氏に集約されたことにより、受賞決定に至った。

<放送>

本年度の放送部門には、推薦委員と選考審査委員から、大臣賞12名、新人賞16名の候補者がノミネートされた。第一次選考審査会では、ここから候補者を大臣賞5名、新人賞8名に絞り込み、各候補者の作品を審査委員全員で見直し、第二次選考審査会に臨んだ。対象となったのは、ドラマやドキュメンタリーのプロデュース、演出、取材・構成、脚本である。この中で、連続ドラマの一作品については、プロデューサー、脚本家、演出家のそれぞれがノミネートされ、誰の力が一番大きいのが討議された。放送番組は集団創造でもあるので、この検討は他の候補者の作品についても重ねられた。結果、大臣賞については、「坂の上の雲」(NHK)のプロデューサー・西村与志木氏が多くの支持を得て選出された。ドラマ化に至るまでの数々の困難を乗り越え、日本の近代史をスケール豊かな群像劇として実現させた志と努力が尊い。新人賞では、「その街のこども」(NHK)の脚本に票が集まり、渡辺あや氏が選出された。阪神・淡路大震災が残した心の傷を若い男女のつづやきにも似たやり取りの中に滲ませる語り口に非凡な才がうかがわれる。

<大衆芸能>

本部門の新人賞候補には個人9名とコンビ2組の計11組が、また大臣賞候補には個人12名とコンビ1組の計13組がノミネートされた。そしてそれぞれの分野を代表する審査員から推薦理由等が述べられ、活発な議論が行われて、第一次選考審査会では新人賞部門が3組、大臣賞では5組の候補が残されて、第二次選考審査会が行われた。

その結果、落語、漫才、津軽三味線、ジャズ、ピアノ、語り部など、広範な大衆芸能候補者の中から、まず新人賞としてクラシックの名曲に果敢に取り組み、自ら歌詞を付けて優れた歌唱を示した歌手、平原綾香氏が選出された。

また大臣賞は、この賞が功労賞ではなく、対象事業の活躍に対して授与されるべきものである、という論議を踏まえた上で、音楽界からは芸能生活50余年、本年度はさらに見事な実績を残した加山雄三氏に、演芸界からは大病を経てのち、さらに飛躍的に芸風を広げた夫婦漫才師、宮川大助・花子氏に決定した。

<芸術振興>

本年度の本部門は優れた候補者が多く、選考審査会において白熱した議論をした結果、大臣賞には音楽の世界に総合的かつ斬新な観点を導入した作曲家の三輪真弘氏に決定した。最終まで残った候補は、抜きんできた実績があり、芸術振興に対する功績は多大なものがあり、芸術選奨の趣旨に照らしていずれも受賞に十分値する方ばかりであった。なかでも三輪氏は「三輪真弘音楽藝術」というこれまでの思考の集大成を出版し、その総合的な音楽活動が芸術振興において、本年度の特筆すべき業績と評価された。また、新人賞には、「アーツ千代田3331」の開館によって今年度の創造拠点形成において最大的话题を集め、芸術振興に新機軸を打ち出した現代美術家中村政人氏を決定した。本年度の候補としては、選考審査員、推薦委員から、大臣賞候補として32名、新人賞候補として19名の推薦があった。第一次選考審査会では、全候補について、推薦理由、業績等が本部門の選考対象としてふさわしいかどうかを丁寧に審議した。その結果、大臣賞候補4名、新人賞候補4名に絞り込み、第二次選考審査会で、その後の調査資料を加えて、審議の結果前述の決定をしたものである。

<評論等>

評論等部門においては、選考審査委員及び推薦委員から、大臣賞として16名、新人賞として11名の候補者が推薦された。同一候補者が大臣賞、新人賞双方に推薦されている場合があり、実質的に候補者は23名であった。第一次選考審査会において、これらの候補者について審議した結果、大臣賞候補8名、新人賞候補4名が決定した。いずれの候補作品もきわめて質の高い内容であったので、第二次選考審査会では様々な視点から熱心な議論が交わされたが、選考の基準として、何らかの芸術現象を主題とするものをまず優先すること、学術的に優れた内容であることは当然としても、単に専門家のためだけの学術論文ではなく、広く一般社会に訴える価値のあるものを選ぶこと、及び特に新人賞については今後の活躍が大いに期待できること、を確認して選考を進めた。その結果、大臣賞には、明治初期以降の唱歌やうたごえ運動を中心に、音楽と政治や社会とのかわりを新鮮な視点で論じた渡辺裕氏と、去る大戦中の日中両国映画交渉の歴史を同時代の文献や資料を精査してまとめた晏妮氏が選ばれ、また新人賞には、戦後美術の歴史においてともすれば忘れられがちな肉体表現によるパフォーマンスの諸相を、丹念な資料調査に基づいて明らかにした黒ダライ児氏が選出された。

<メディア芸術>

メディア芸術部門は始まって三年目であり、大臣賞13名、新人賞11名と多くの推薦があり、一次選考審査会で半数程度に絞り込まれた。二次審査会までの間に未見の作品については閲覧視聴できる機会を設けた。二次審査では推薦理由を陳述する形で選考を行ったが、多彩な分野からなっている本部門では表現ジャンルを代表するような作家の作品が並び立つことになり、過半数の支持が得られるまで討議を重ねた。大臣賞にはテレビゲームそのものを常に主導してきた宮本茂氏の「スーパーマリオギャラクシー2」が、子どものための表現という節度を堅持しながら、革新的技法を違和感のない表現にまで高めた作品として選出された。新人賞の選出は意見が分かれたが、今後の活躍に期待するという趣旨から年齢も勘案し、クワクポリョウタ氏のデバイスアート「10番目の感傷(点・線・面)」が選ばれた。シンプルな映像装置ながらも、空間を移動しながら満ちた光と影はこよなく美しく、表現ジャンルすらも越境して、この分野にこそふさわしい作品であった。

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家、文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので、各部門2名以内（ただし、放送部門、芸術振興部門、メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家（個人）を対象とするもので、各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については、原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は、毎年、原則として1月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては、これまでの業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い、受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため、各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け、選考審査会に候補者を推薦する（芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家、専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員がそれぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、芸術振興部門については、他部門の選考審査員からも、推薦することができるものとする。また、評論等部門については、芸術振興部門を除く他部門の選考審査員から、それぞれの部門に係る「芸術評論家」または「文化芸術活動に著しい貢献のあった者」を推薦することができるものとする。
- (2) 推薦委員は、それぞれの部門にのみ推薦することができる。ただし、芸術振興部門については、他部門の推薦委員から推薦することができるものとする。
- (3) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

平成22年度(第61回)芸術選奨選考審査員

【演劇部門】		【美術部門】	
近 藤 瑞 男	演劇評論家、共立女子大学教授	飯 沢 耕 太 郎	写真評論家
酒 井 誠	日本大学非常勤講師、元(財)新国立劇場運営財団上級主幹	逢 坂 恵 理 子	横浜美術館長
立 花 恵 子	演劇評論家	川 口 直 宜	泉屋博古館分館長、美術評論家
出 口 逸 平	大阪芸術大学教授	近 藤 幸 夫	慶應義塾大学准教授
八月一日 教 宏	演劇評論家	鈴 木 博 之	青山学院大学教授
水 落 潔	桜美林大学名誉教授、演劇評論家	宝 木 範 義	明星大学教授
森 洋 三	演劇評論家	松 永 真	グラフィックデザイナー
		松 原 茂	(財)根津美術館学芸部長
		真 室 佳 武	東京都美術館長
		雪 山 行 二	和歌山県立近代美術館長
【映画部門】		【放送部門】	
大 林 宣 彦	映画作家	石 橋 冠	演出家
新 藤 次 郎	(株)近代映画協会代表取締役社長、協同組合日本映画製作者協会代表理事	上 滝 徹 也	日本大学教授
根 岸 吉 太 郎	映画監督、東北芸術工科大学映像学科長	重 延 浩	テレビプロデューサー、(株)テレビマンユニオン代表取締役会長
宮 澤 誠 一	日本大学教授	下 重 暁 子	作家、(財)JKA会長
村 川 英	城西国際大学教授、映像評論家	鶴 橋 康 夫	演出家
横 川 眞 顕	日本大学名誉教授、映画評論家	中 島 丈 博	脚本家
渡 辺 祥 子	映画評論家	森 治 美	脚本家
【音楽部門】		【大衆芸能部門】	
大 谷 紀 美 子	学校法人相愛学園長	有 川 寛	演芸評論家、プロデューサー
吉 川 周 平	京都市立芸術大学名誉教授	京 須 借 充	演芸評論家、落語プロデューサー
木 村 俊 光	声楽家、桐朋学園大学教授	児 山 紀 芳	音楽評論家
白 石 美 雪	音楽評論家、武蔵野美術大学教授	中 村 真 規	演芸プロデューサー
中 村 孝 義	音楽評論家、大阪音楽大学理事長・学長	松 枝 忠 信	演芸評論家、元スポーツニッポン新聞社編集委員
野 川 美 穂 子	邦楽評論家、東京芸術大学非常勤講師	矢 野 順 子	演芸評論家、元国立演芸場企画制作課長
三 宅 幸 夫	慶應義塾大学教授	湯 川 れ い 子	音楽評論家、作詞家
【舞踊部門】		【評論等部門】	
藍 本 結 井	舞踊評論家	荻 田 清	梅花女子大学教授
池 野 恵	舞踊評論家	織 田 紘 二	(独)日本芸術文化振興会顧問
桜 井 多 佳 子	舞踊評論家	小 林 義 武	成城大学教授
佐 々 木 涼 子	東京女子大学教授	高 階 秀 爾	大原美術館長、(財)西洋美術振興財団理事長
平 野 英 俊	伝統芸能評論家	田 中 千 世 子	秋章学園短期大学教授、映画評論家
丸 茂 美 恵 子	日本大学教授、舞踊評論家	田 中 優 子	法政大学教授
山 野 博 大	舞踊評論家	古 井 戸 秀 夫	東京大学大学院教授
【文学部門】		【芸術振興部門】	
菅 野 昭 正	文芸評論家、世田谷文学館長	磯 山 雅	国立音楽大学教授
篠 弘	歌人、日本現代詩歌文学館長	衛 紀 生	可児市文化創造センター館長兼劇場総監督
高 樹 の ぶ 子	小説家	加 藤 種 男	(財)アサヒビール芸術文化財団事務局長
鷹 羽 狩 行	俳人、(社)俳人協会会長	熊 倉 純 子	東京芸術大学教授
平 出 隆	詩人、作家、多摩美術大学教授	後 藤 和 子	埼玉大学教授
松 浦 寿 輝	小説家、映画評論家、東京大学大学院教授	浜 田 剛 爾	国際芸術センター青森館長
三 浦 雅 士	文芸評論家	吉 本 光 宏	(株)ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室長
		【メディア芸術部門】	
		小 野 耕 世	国士館大学客員教授、映画・漫画評論家
		草 原 真 知 子	メディアアート・キュレーター、早稲田大学教授
		源 田 悦 夫	九州大学大学院教授
		鈴 木 伸 一	杉並アニメーションミュージアム館長
		浜 野 保 樹	東京大学教授
		浜 村 弘 一	エンターブレイン代表取締役社長
		松 谷 孝 征	(株)手塚プロダクション代表取締役社長

※敬称略・部門内五十音順

平成22年度(第61回)芸術選奨推薦委員

【演劇部門】		【美術部門】	
池内美奈子	新国立劇場演劇研修所ヘッドコーチ	天野一夫	豊田市美術館チーフキュレーター
大島幸久	報知新聞社記者	遠藤彰子	武蔵野美術大学教授
亀岡典子	産経新聞文化部編集委員	大谷省吾	東京国立近代美術館企画課主任研究官
九鬼葉子	演劇評論家、大阪芸術大学短期大学部准教授	小川待子	陶芸家
古城十忍	(株)オフィス・ワン・ツー代表取締役社長、劇作家、演出家	笠嶋忠幸	公益財団法人出光美術館学芸部学芸課長代理
小玉祥子	毎日新聞社学芸部編集委員	金子賢治	茨城県陶芸美術館長
高橋豊	毎日新聞社客員編集委員	金子隆一	東京都写真美術館専門調査員
伊達なつめ	演劇ジャーナリスト	南條史生	森美術館長
法月敏彦	玉川大学教授	野地耕一郎	練馬区立美術館学芸員
村上湛	明星大学教授	福永治	国立新美術館副館長
		舟越桂	彫刻家
		降旗千賀子	目黒区美術館学芸主査
		古谷誠章	早稲田大学教授
		松井みどり	美術評論家
		森山明子	武蔵野美術大学教授
		柳沢秀行	(財)大原美術館学芸課長
		吉中充代	京都市美術館学芸課課長補佐
【映画部門】		【放送部門】	
内海陽子	映画評論家	浅野加寿子	NHK放送博物館長
大高宏雄	映画評論家	芦澤務	日本大学非常勤講師
恩田泰子	読売新聞社文化部記者	石井彰	放送作家
勝田友巳	毎日新聞社記者	石飛徳樹	朝日新聞記者
神谷雅子	京都シネマ代表	井上由美子	脚本家
古賀重樹	日本経済新聞文化部編集委員	音好宏	上智大学教授
高橋聰	大阪日日新聞社編集委員	砂川浩慶	立教大学准教授
田中まこ	神戸フィルムオフィス代表	藤田真文	法政大学教授
野村正昭	映画評論家	藤久ミネ	放送評論家
萩尾瞳	映画評論家	南川泰三	作家、放送作家
【音楽部門】		【大衆芸能部門】	
網干毅	関西学院大学教授、音楽評論家	阿木燿子	作詞家、女優、エッセイスト
岡田暁生	京都大学人文科学研究所教授	生田誠	芸能研究家
加納マリ	武蔵野音楽大学講師	上柴とおる	音楽評論家
小銀治邦隆	東京芸術大学教授、作曲家、指揮者	香取良彦	洗足学園音楽大学教授
國土潤一	声楽家、合唱指揮者、音楽評論家	川崎浩	毎日新聞社学芸部編集委員
志村哲	大阪芸術大学教授	木村万里	ライブプロデューサー
谷垣内和子	邦楽評論家	後藤雅洋	ジャズ評論家
長木誠司	東京大学大学院教授、音楽評論家	布目英一	演芸研究家
寺内直子	神戸大学大学院教授	松尾美矢子	演芸評論家
楢崎洋子	武蔵野音楽大学教授	茂木仁史	(独)日本芸術文化振興会演芸場部演芸課長
【舞踊部門】		【評論等部門】	
阿部さとみ	舞踊評論家	井上章一	国際日本文化研究センター教授
新藤弘子	舞踊評論家	川村湊	文芸評論家、法政大学教授
祐成秀樹	読売新聞社文化部記者	木下直之	東京大学教授
多々納みわ子	舞踊家、(社)日本バレエ協会理事	松あつこ	舞踊ジャーナリスト
立木燦子	舞踊評論家	武田潔	早稲田大学教授
永田宜子	新国立劇場運営財団制作部舞踊チーフプロデューサー	中川俊宏	武蔵野音楽大学教授
前田みつ恵	読売新聞社記者	羽田昶	武蔵野大学客員教授
村尚也	舞踊研究者、演出家	樋口隆一	明治学院大学教授
村山久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	復本一郎	評論家、神奈川大学名誉教授
望月辰夫	新国立劇場運営財団制作部舞踊プロデューサー	茂手木潔子	有明教育芸術短期大学教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
稲葉真弓	作家、詩人	阿部一直	山口情報芸術センターチーフキュレーター
川上弘美	小説家	阿部芳久	(財)画像情報教育振興協会文化事業部長
鳥田雅彦	法政大学教授、作家	石黒敦彦	美術家、多摩美術大学・武蔵野美術大学非常勤講師
南木佳士	作家、医師	神村幸子	アニメーター
沼野充義	東京大学大学院教授	鈴木裕	ゲームクリエイター
蜂飼耳	詩人、作家、早稲田大学非常勤講師	中谷日出	NHK解説委員
林あまり	歌人	藤本由香里	明治大学准教授、漫画評論家
正木ゆう子	俳人	細萱敦	東京工芸大学准教授
宮部みゆき	小説家	水口哲也	プロデューサー、ゲームクリエイター
村田喜代子	作家	横田正夫	日本大学教授